

砂川



むかし。

今の城前町から東印場町の間をぬうようにして、一すじの川が流れていました。川はばは、さほど広くはありませんが、水がゆたかで、いつもラムネ色にすきとおっていました。

その川のほとりに、一けんの家があり、村でもひょうばんの、よくばりなばあさまが住んでいました。

「ああ、暑い、暑い。こう暑くつちや何も手がつけられんわい。どれ、川でせんたくでもしてこようかのう。」

夏の昼下がり、ばあさまは、ぶつぶつとひとりごとを言いながら、せんたくも

のをこわきにかかえ、石橋のたもとへ出かけました。

「しめしめ、だれもおらん。わし一人で川の水を全部使わせてもらおうかのう。」ばあさまは、ほくほくしてせんたくを始めました。

しばらくすると、

「もし、そのおばあさん。」

低く、弱々しい声が頭の上から聞こえてきました。ばあさまが見上げると、うすよごれたわんが目に入りました。旅の坊さまです。

墨染の衣は色あせ、ぼろぼろになってだらりとたれ下がっています。かさのやぶれめからのぞいている二つの目は、光を失って、ぼんやりと遠くを見つめているようです。

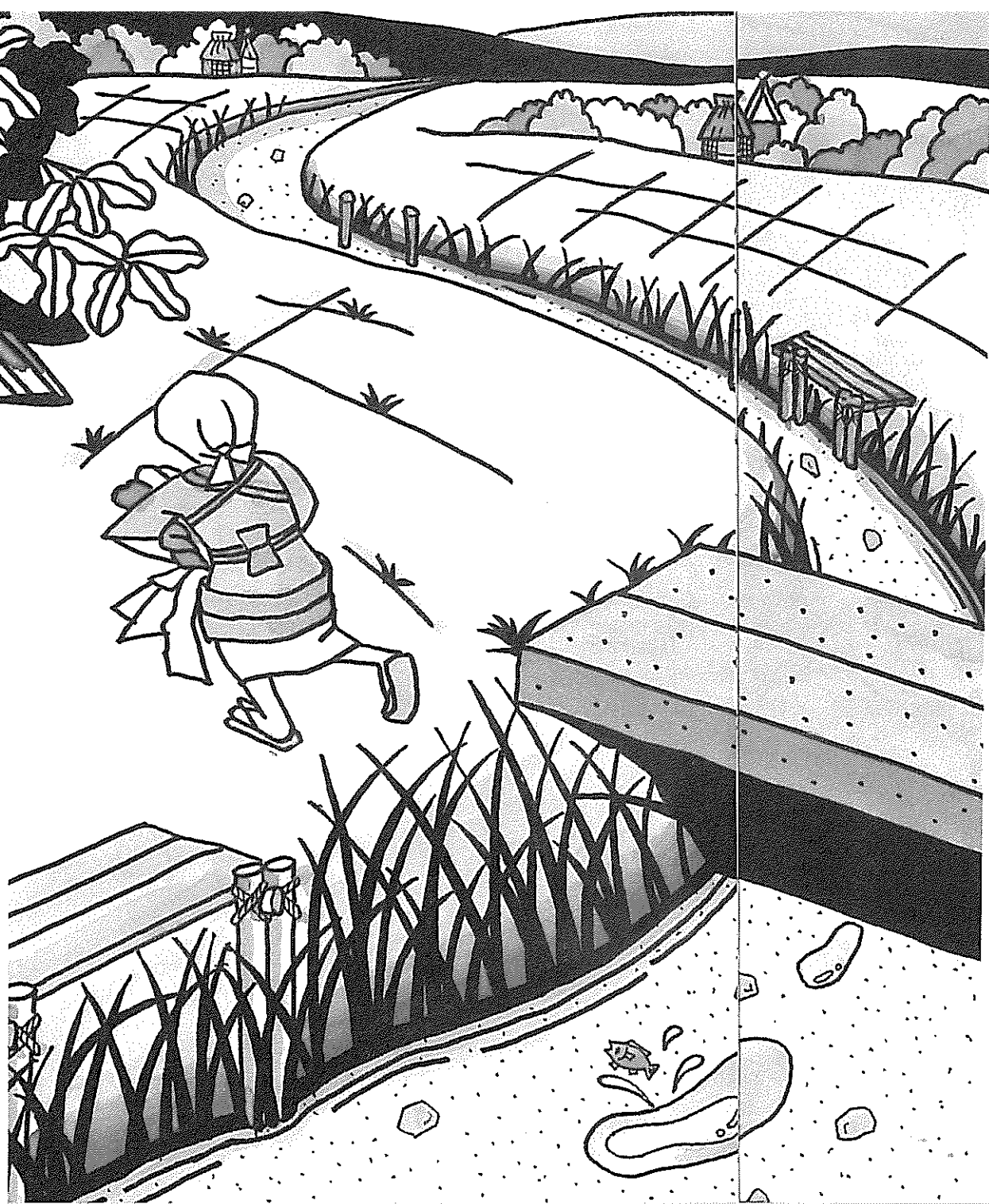


「わたしは、あちこちを旅する坊主でございます。朝から一ぱいの水も口にしておりませぬ。この暑さで、もうのどがからからです。どうか、水など一ぱいめぐんではくくださらぬか。」

と、あえぎあえぎたのみました。

「旅の坊さま、まあ、今日はなんとも暑いことじやなも。こんな暑さの中を旅をしてこられたおまえさまに、たんとどうぞと言いたいところじゃが、おまえさまにめぐんであげる水など、一ぱいとてないわ。この川の水はな、この村の大事な水じゃからのう。」
こう言いすてると、そしらぬ顔をしてまたせんたくを始めました。
「ほう。」
坊さまは、苦しそうに深くため息をつきながら、えんりよがちに二度も三度もたのみました。
それでも、ばあさまはふり向こうとはしませんでした。

しばらくすると、坊さまは、うすく、両眼をとじ、何か小声でぶつぶつとなえ始めました。
「なむなむだいし、なむなむだいし、なむなむだいし……。」
やにわに、持っていた錫杖の先で石橋をコツコツと二つたたくと、よろよろとどこへともなく立ち去っていきました。
「ん、ありやうや……。」
とつぜん、ばあさまの手元から水がぐんぐんひき始め、みるみるうちに、川は砂ばかりになってしまいました。砂でまみれたせんたくものをかかえ、ばあさまは、がちがちふるえながら家へにげ帰りました。



それからというものの、ばあさまはすっかり心を入れかえました。けれど、砂ばかりになってしまった川は、二度と美しい川にもどることはありませんでした。